

## つくばを走る

吉村建二郎 生命環境科学研究科構造生物科学専攻准教授  
(よしむら けんじろう／細胞生物学)

### 大学のループを走る

一昨年はずくばマラソンに出た。生物系の学生の顔もいくつか見えた。つくばマラソンの前には大学のループを走る学生と教職員の数が特に多くなる。そして、終わると冬の到来を告げるかのように走る姿がめっきり少なくなる。

つくばは空気がすっきりしている。走るとなおさら感じられ、空気を吸い、血管のドクドクという音を聞くと体が浄化されていくのが実感できるようだ。しかし、体の健康のためだけに走っているのだろうか？ そうでもない。走っている間は頭の中が真っ白になっている。あるいは、いつもは考えないようなことまでいろいろ考えごとをしながら走ることもある。ところが解放たれているのを感じ、それが快感である。

生来、走ったり歩いたりすることが好きなのであるが、通勤は車に頼っている。これは不本意だ。筑波大学に来る前は電車通勤をしていたが、その時間は大切な放心と思索の時間だった。運転しながらはそのよ

うなことはできない。そうは思うのであるが、今通った信号が何色だったか自信がなくてひやっとすることがある。

「い、考を醗酵させるに適した三つの環境」として知られている枕上、鞍上、厠上について寺田寅彦が「路傍の草」の中で考えを巡らしている。現代では、馬には乗らない代わりに電車の車上がアイデアがわきあがる場所であると述べている。その通りだと思う。なぜ、枕の上と鞍の上と便座の上で創造的になりうるかということ、「肉體が拘束されて居るかはりに精神が解放されて居る」からであると書いてある。

その要件からいうと、長距離走は肉体を絶え間なく追い詰めるスポーツであり、そのときに精神が解放されるというのは同じ理由かも知れない。寺田が随筆を書いた大正にはジョギングの習慣はなく、また市民ランナーとかはいなくて、これほど多くの人が走ることに夢中になるとは想像もしなかったに違いない。

## 筑波山を走る

筑波山は最も標高が低い深田久弥選定の百名山である。筑波山に連なってさらに低いうねりが北東と南東に広がっているが、そちらは山登りには物足りない。筑波登山に来る人も、筑波山以外には登らないに違いない。しかし、意外な人たちが走り回っている。

マウンテンバイクというオフロード用の自転車は、日本の多くの急峻な山道を登ることは困難である（それでも、マウンテンバイクをかついで山登りをする酔狂者も多いらしい）。筑波山に連なるゆるい山並みはマウンテンバイクで走り回るにはちょうど楽しいアップダウンである。汗を流しながら登ったり、風に吹かれながら下ったりの連続でかなりの割合を自転車から降りることなく走り回ることができる。

ところがある日、いつものところに行くところ「二輪進入禁止」との立て札があった。この立て札は、筑波山だけではなく日本のいたるところに立ちつつあるという話を聞いていたが、ついに筑波山にも立ってしまったようだ。二輪が山道で疎まれるのは、おそらく、マウンテンバイクのスピードにハイカーが危険を感じることに、山道が削れてしまうことに原因があるように思う。

住んでいたことのあるアメリカのウィスコンシン州ではマウンテンバイクとハイ

カーの道が別々になっていたし、時々、路面補修のボランティア作業もあった。日本の山でも、マウンテンバイカーが増えてきたら、このような組織的な取り組みが必要になってくるように思う。

ロードバイクに乗る人も筑波山の麓の舗装道路を走り回る。趣味で走る人から練習で走る競輪選手もいる。有名な坂は不動峠に登る坂である。車の通行が少なく適度な長さなので、時間を計りながら必死になって登るトレーニングをするには最適だ。自分の息だけを聞きながら林の中を登るこの作業をスティックと言わずに何と言おう。

このような入れ込んでいなくても楽しめる自転車道もある。廃線になった関東鉄道筑波線の線路の跡を自転車道にしたりりんロードだ。去年の春には研究室の新歓遠足でりんロードの北の終点である岩瀬までサイクリングをした。一昨年の新歓では牛久大仏までサイクリングをした。体力あつての研究である。今年の新歓遠足ではどこを走ろう。